

アンドレ・シュヴァルツバルト

——どこにも居場所をもたないユダヤ人—— (二)

フランシーヌ・コフマン
(田所光男訳)

アンドレ・シュヴァルツバルト (André Schwarz-Bart) は、地上を行くその肉体的な活動を終えるにあたり、一筋の細い白煙とわずかな灰だけを残すことを選んだ。二〇〇六年一〇月三日、キプール^(一)の翌日、居住地としていたあのグワドループのグランド・テール島で茶毘に付された。思い出されるのは、ヨーロッパのユダヤ人諸社会の殺戮に捧げられた彼の傑作『最後の正しき人』(Le dernier des Justes)の最終頁である。「こうして、この物語はどこかに墓参りをする事では終わらないであろう。なぜなら、「ユダヤ人が焼かれた強制収容所の」焼却炉から出る煙は、他の煙とまったく同じように物理の法則に従う以上、微粒子は風のまにまに離合集散し、押し流されてしまうからである。唯一可能な巡礼は、尊敬すべき読者よ、嵐をはらんだ空を時々憂鬱に見上げるといふことになろう。」

生きていた時と同じように、彼はつま先でそつと歩きながら旅立った。だから、若い世代が彼の名前をほとんど知らず、また戦後に思春期を送った人々が彼のことを、ただ一冊の作家、一九五九年ゴンクール賞の受賞によりはつきりとその地位を確立した、あの『最後の正しき人』の著者として覚えているとしても、何ら驚くにはあたらない。

歴史記述や自伝的な語りには収まりきれず、そして、ユダヤ人にも非ユダヤ人にも、ヨーロッパ人にも海外の読者にも、思春期の若者にも熟年期の人々にも語りかけることのできる、ユダヤ人ジェノサイドについての文学作品が栄冠を授けられたことが当時もった意味を、この小説の電撃的で国際的な成功に立ち会わなかった人々に、いったいどのように説明できるであろう。この本が多くの精神に消えることのない痕跡を刻み込んだことを、新聞雑誌に(六カ月以上にわたり)議論を巻き起こしたことを、そして、この本に「記憶の義務」の最初の表現が組み込まれたことを、いったいどのように数行で描き出せるであろうか。一九五九年ジェノサイド文学はまだ胚胎期にあったこと、アイヒマン裁判はまだ起こっていなかったこと^(三)、シヨアー研究に関する記念館や大学の部局は存在していなかったこと、出版界における『アンネ・フランクの日記』(一九五〇年)の成功だけが比肩しようするような国際的な覚醒をシュヴァルツバルトが引き起こしたことを、いったいどのように理解させることができるだろうか。

至るところで異邦人

「万人のための読書」や「一面五段抜き」といった、ピエール・デュマイエの見逃せないテレビ番組に将来のゴンクール賞受賞者が出演した(一九五九年一〇月と一一月)あと、フランスのただ一つのテレビ・チャンネルの視聴者の受けた動転を今日覚えていて人は稀である。当時、文学史家ピエール・ド・ボワデツフルは次のように述べている。『最後の正しき人』は、アルベール・カミュの『ペスト』^(四)以来現れた、まさしく最高のフランス小説と言えよう」(Bulletin de l'Education nationale, n° 33, 19

novembre 1959)。

確かに、アンドレ・シュヴァルツバルトは完全に忘却の中に沈んでいたわけではない。この九月二二日、亡くなる一週間前、マルチニックとグワドループを訪れていたルノー・ドンヌデュー・ド・ヴァーブル文化大臣から、芸術文芸オフィシエ勲章を授与されている。またその折、彼の妻、アンチル人作家シモーヌ・シュヴァルツバルトには同じくコマンドール勲章が授与された。しかしもちろん、彼の最後の大きな喜びは、それよりひと月前に彼らの息子ジャックによってもたらされた。ニューヨークで活動するジャズ・サクソフォーン奏者のジャックは、八月末、ジャズとグウォカ (gwo ka グワドループの太鼓) を結合させたアルバム『ソネ・カ・ラ』(Sone ka la) を編み、ヴィレットのジャズ・フェスティヴァルに参加して注目されたのであった^{五五}。また、彼らのもう一人の息子ベルナルに息子が誕生したことも同じように大きな喜びとなり、その孫に彼は、エリという名前を選ぶことができたのである^{五六}。

九月三〇日土曜日、シュヴァルツバルトは、グワドループのポワンタピトル (Pointe-à-Pitre) で、心臓手術のあと息を引き取ったが、決して流浪の中で死んだのではない。彼は黒人やムラート^{五七}の生活を共有することを断固選び取っていた。西欧によってアフリカから強制連行され、隷従させられ、非人間化された黒人奴隷の苦しみと迫害に、彼は自らの苦しみと迫害の経験から開かれていったのである。しかし、セネガル、スイス、パリで生きたあと、知性とユーモアできらめく目の奥に、モーゼル川のほとり、ポンティフロワのユダヤ人地区の思い出を常に刻み込んでいたとしても、彼は、自分は至るところで異邦人だ、と言っていた。

一九二八年五月二三日、彼がアブラハム・シュヴァルツバルト (Abraham Szwarcbart) の名前で生を受けたのは、戦前のメッスのそのユダヤ人地区である。家族はポーランド出身で、彼の母語はイディッシュ語であった。戦争の悪化のため学校には行けず、彼はフランス語を獲得するのに懸命の努力をしなければならなかった。一九四二年、両親と二人の兄弟、それに大叔母が強制収容所に送られて、彼は永遠に消えない傷を負ってしまった。

アンドレ・シュヴァルツバルトは、共産主義者であった時期のこと、レジスタンスやフランス軍で戦ったことなどについてはあまり語らなかったが、彼が労働者、教育者、学生、そして独学の作家であったことは知られている。

一九五三年、彼は最初のエッセーを、ユダヤ人学生の雑誌『カデイマ』に発表した。この時期以来、彼は、彼の人生、それに彼が当時付き合っていたたくさん若いうちのユダヤ人たちの人生を変えてしまった恐るべき出来事、まだショアーとは呼ばれてはいない屠殺場に引かれてゆくままになって羊の群れの殺戮になぞらえられていたあの惨劇を、文学作品に変形することを考えていた。ワルシャワ・ゲットで戦った人々やパレスチナのユダヤ人兵士のヒロイズムは、絶えず再生する迫害を蒙って、わずかな者が常に生き延びてきた何世代ものユダヤ人の精神的なヒロイズムに優るものではないことを、彼の同時代の人々に説明したかったのである。

『アルシュ』において

一九五六年一二月、アンドレ・シュヴァルツバルトは『FSU 雑誌』^(八) (翌月、名前を変えて『アルシュ』となった) に、のちに『エルニー・レヴィの伝記』と名づけられることになる小説の抜粋を「正しき人の伝説」というタイトルで発表した。その中で彼は、抑圧されているが、自分たちを残酷に扱う者たちの武器と暴力を採用す

ることを拒否する、土地も軍隊もない民族の尊厳を語った。彼は、五〇年代の風潮に逆らつてこうした主人公を選んだ大胆さを自覚して、物語の前に、次のような緒言を置いている。これは、三年後、ゴンクール賞受賞からほどなくして『エクスプレス』誌の中で、一行も変えることなく再び取り上げられることになる⁽¹⁾。

なぜユダヤ小説なのか、なぜ主人公の死と彼の世界の絶滅で終わるこの小説なのかと、私は尋ねられます。もつと魅力的な主題がないからでも、悲しみや死を好むからでもないと思います。(…) 私は小説の主人公を、ワルシャワ・ゲットーの蜂起者の中にも、レジスタンス——彼らもまた大変な例外でした——の中にも求めませんでした。私は、私たちの古くからの祖先がそうであったように、心の武装を解き、痛みの中でナイーヴであり続ける主人公のほうが好きでした。このタイプの主人公は華々しいものではありません。今日ではややもすれば、もつと雄々しい人間性の名において異議が唱えられます。ゲットーという語はやや軽蔑的に発せられるということになっています。ユダヤ人の千年の歴史は犠牲者とその虐待者の作るたわいもない年代記にすぎないとしたいのでしよう。私たちは、未来のことを心配したり熱狂したりして、自分たちの過去を尊重することを忘れてしまいました。しかしユダヤ人の歴史は、犠牲者の単なる総計以上のものであると思います。そこではどんなに普通の運命にも偉大さが現れています。それ故私は、無防備で憎しみをもたないが、しかし、今日ほとんど消えてしまった伝統に従つて真に人間である、古い家系のユダヤ人を示したいのです。

一九五六年一二月に『アルシュ』に発表されたテクストは第二版であり、以後なお多くの変形を蒙ることになる。一九五九年秋、数千ページにも及ぶ書き直しを経て、小説の第五版がスウィユ出版社から刊行された。一九五六年に発表された抜粋に注目し、この若い著者にスウィユに原稿を委ねるよう勧めた報道担当セルジュ・モンテニーの慧眼のおかげである。『アルシュ』は、シユヴァルトを掲載した最初の雑誌であることを誇り、その夏、雑誌の文芸評論を担当していたユダヤ人作家アルノルド・マンデルのペンで、次のように述べた⁽²⁾。

これは、小説作品の歴史、とりわけフランスのユダヤ文学という非常にもろい領域において、記念すべき本である。シユヴァルトは〈才能〉をもっているだけでは満足しない。彼は、ユダヤ人の運命が永遠にかつ現在の悲劇であるという感覚を深く持っている……(彼の本は)ドラランシー⁽³⁾の始まりまでのイスラエルの身振りの年代記であり、ミドラッシュ⁽⁴⁾である。そしてまた、この著作は終末論であり、生じたばかりの出来事の告知である。人々がよく理解できるように、預言者⁽⁵⁾詩人が必要なのである。

『最後の正しき人』の最終版は、先立つ諸版の様々な意図、主題、調子、リズムなどが、ゆつくりとした有機的な分泌によつて、一つの一様な固まりに融合した結実である。雲の墓石しか残っていないハシディズム⁽⁶⁾社会に、イディッシュ文学の精神で敬意を表するための、婉曲なアイロニーのひらめきに貫かれた叙情性。また、白人文明であり敬虔なキリスト教文明である、征服的で温情主義的な西欧文明の良心を、ヴォルテールの風刺の精神で糾弾するための辛辣なアイロニー——それは、自己憐

憫を逃れるための、不気味なブラック・ユーモアの混じたアイロニーである。さらにまた、「私たちの眼は、死んだ星々の光を受け取っている」という、小説の冒頭の一文がすでにそのヒントを与えてくれているが、単線的な語りは、入念な、しかし見えにくい構造に結びついている。

「正しき人」(Lamed-vav)

アウシュヴィッツがどのようにして可能であったのかを理解するためには、過去の歴史に飛び込み、一見前代未聞に見えるこの出来事の前触れをそこに見分けなければならぬ。従って横系には、差別や侮辱、虐殺の政策に基礎を置く反ユダヤ主義の突発を伴った、西欧における十字軍以降の歴史的事件が取り上げられる。縦系は、たとえ疑念と無信仰が根を伸ばすとしても、自分たちの苦しみに神秘的で贖罪的な価値を与えようとするユダヤ社会の精神的反応によって構成される。

この小説の織物にはつきりと見える図柄は、迫害と追放の風に追い払われてヨーロッパを彷徨うユダヤ人家族、レヴィ家の物語である。その家族の一人は、各世代において集団の運命を体現する。シュヴァルツバルトの天分は、サントゥジュヌヴィエーヴ図書館^(二二)や利用しえた他のあらゆる図書館のユダヤ資料を調べ尽くす堅牢な資料収集によって、これらの象徴的で模範的な人物たちから、生身の存在を作り出したところにある。しかも彼は、レヴィ一族を、キドウシュ・ハシエム(「殉教者」)にするばかりではなく、ツァディキーム^(二三)(ハシディズム伝統の「正しき人」)の家に与えられる力を不本意ながらも授けられた精神的指導者にするこゝとで、読みの様々な水準を結合することができたのである。

この「正しき人」の役割は、タルムード^(二四)の伝説の非常に個性的な解釈において頂点に達する。その伝説とは、各世代には三十六人の「正しき人」が存在し、彼らが世界の存続を可能にするというものである。シュヴァルツバルトは、レヴィ一族が、このラーメドゥヴァーヴ(あるいは、彼がイディッシュ語でそう呼んでいるように、ラーメドゥワーフ)の一人を、各世代で出現させる奇妙な特権を世襲的に受け取ってきたと想像する。最初のラーメドゥワーフは、一八五五年三月一日、イングランドの司教の引き起こした殺戮の際に殉教者として死んだ、ヨークのヨム・トヴ・レヴィであるという。最後は、私たちの同時代人エルニー・レヴィである。ドラংশーに収容された後、アウシュヴィッツに送られる。その鉛で封印された貨車の中で、まわりに集まった子供たちに慰めの物語を(ヤヌシュ・コルチャック^(二五)のように)語った後、焼却炉の中で消え失せる。各エピソードがユダヤ史の現実の一章に源泉をもつとしても、その文学的転換により、「涙の杯」の伝説^(二六)の中のように同胞の苦しみを集めて神に捧げる主人公たち、すなわち「正しき人」たちの役割は統合され、凝縮され、そして讃えられている。

エルサレム賞

歴史と伝説と文学的再構成の微妙な混合は、この小説「契約」を受け入れることのできない人々を一人ならず当惑させた。また、シュヴァルツバルトは不本意ながらもユダヤ民族と強制収容所世界の犠牲者との代弁者になったものの、伝統の真正の保持者、真の「証人」だと自認するユダヤ人からは、その役割を否認された。

彼の小説、とくにユダヤの精神性における苦しみの役割の解釈をめぐって引き起こされた論争を通して、キリスト教徒の中には、『最後の正しき人』を、ただキリスト

だけが不在であるキリスト小説と見る人も現れた。またシオニストと旧軍人会は、シュヴァルツバルトがディアスポラ諸社会の非暴力を高く評価しようとするところからレジスタンスや戦闘員の主人公を登場させない、その「模範的な」性格を攻撃しなければならぬと思った。こうして不本意にもスポットライトを当てられ、弁明しなければならぬようになったシュヴァルツバルトは、彼に向けられた訴訟に深く傷き、当惑し、とりわけユダヤ同胞からの攻撃に茫然となった。彼はセネガルのジャングルの奥の奥に、パリの名士の文学サロンからできる限り遠くへ逃げて行った。

数年が過ぎる。一九五六年に出会ったグワドループの若い学生シモーヌと一九六一年に結婚したアンドレ・シュヴァルツバルトは、新しい小説、より正確には、七巻本になる予定の連作『混血女性ソリチュード』を入念に準備していた。一九六七年に出た第一巻『緑バナナ入り豚肉料理』（シモーヌ・シュヴァルツバルトとの共著）は、半ば失敗であった。グワドループ出身の老女マリオットが死にかけている。パリのある老人ホームを、レアリスムの、さほど華々しくもなく描き出す手法や、クレオール方言と文学的フランス語との連合には、ユダヤ文明を謳い上げた作者の文体は認められなかった。まだ癒えていなかった作家の傷は、再び口を開けてしまった。

幸いにして、イスラエル国家はまさにこうした時期を選んで、一九六七年三月三日シュヴァルツバルトに〈社会における人間の自由のためのエルサレム賞〉を授与することによって、彼が自分自身と和解できるようにした。選考委員会は次のように宣言している。

自分自身の民族を正当化する戦いに加え、彼は、他の抑圧された民族、非道な同胞の手で不正に苦しめられているすべての人々を心に掛ける。黒人の尊厳の解放と復権は、彼にはユダヤ民族の救済に劣らず緊急の課題であると思えるのである。排除、軽蔑、身体的・精神的な拷問の餌食になっているすべての人間の名において、『最後の正しき人』と『混血女性ソリチュード』の作者の、厳しい、憤る、同時にまた憐憫と哀しいユーモアにあふれた声が立ち上る。

二重のメッセージを力強く表現しようとしてきた努力をユダヤ人同胞が認めてくれたことを、シュヴァルツバルトがどれほど重視していたのか十分理解されていない。しかし、一九七二年に刊行した『混血女性ソリチュード』（彼の単著である）がまさしく珠玉の作品であったにもかかわらず、ほとんど関心を引かなかったことで、彼はもう発表せず、ヨーロッパを離れてグワドループに最終的に落ち着こうという決心を固めることになった。

ずっと後になって、七十五歳の誕生日の数日前（二〇〇三年五月）のことであるが、シュヴァルツバルトは、「他の民族の名において語り、正しい音を出そうと試みることで、私は道を誤ってしまった」と、パリのサンジェルマン・デ・プレのカフェで私に語った。しかし、この告白には何という苦渋が含まれていたことであろうか。というのも、ある物語の中にわずか三行しか残っていないなかったグワドループのヒロインを彼が再生させ、厚みを与えたおかげで、グワドループの学校の子供たちが、彼の小説から作られた劇を、毎年、誇りをもって上演していることを彼はとても喜んでいたのである。しかし彼は、誰も彼のテクストの複雑な構造を明らかにしなかったことが残念であった。裏返しにする服のように、一度に両面で読みうる「裏返しにできる」本を自分は書いたと信じていると私に語った。両面とはつまり、黒人の面と、ユ

ダヤ人の面である。すでに『緑バナナ入り豚肉料理』の中で、彼は読者に手がかりを与えていたが、誰もそれを見つげなかった。この無理解のために、作品を発表することを拒否する気持ちがいっそう強まってしまった……しかし彼は書くことを拒否していたわけではなかった。

その日、彼は最後の計画『生の歌』について私に語ってくれた。それは若い世代の読者に再び希望を与えようと構想した本であった。大いに進んでいた『混血女性ソリチュード』の連作には、エルニーの弟モリッツがレヴィイ家の家系に生き残り、マリオットの孫娘と出会うという巻も含まれていたが、結局あきらめてしまったようであった。

イスラエル国家に関しては、彼は愛情を保ち続け、ラジオやインターネットのニュースにしがみつき、いつでも擁護する態勢にあった。しかし彼にとって（彼が主張していた）シオニズムは、このような、あらゆる瞬間における同一化と連帯にとどまるものであった。一九六七年五月と六月の苦悩の時期、そしてキプール戦争の間、彼は住民の運命を共有するべくほとんどお忍びでイスラエルを訪れた。それに反し、イスラエルにある様々な思想傾向の特徴をなす、勝ち誇る舞いや反ディアスポラの態度に組することを彼は拒否していた。彼は自分が本質的に流浪のユダヤ人、どこにも居場所をもたないユダヤ人、自分の民族を失ってしまったユダヤ人、永遠の余所者だと感じていた。

彼はエルサレムのホロコースト記念館（^{ニセ}）が、強制収容所についての見学ルートの終わりに、『最後の正しき人』の結末にある憤りのカディシュ（^{ニム}）（「そして讃え：」）を選んだこと、また、このカディシュは二〇〇五年に開館した新しい記念館の壁にも巨大な文字で記されていることを知っていたのであろうか。

エルニー・レヴィイの生みの親が、棺をもたず、地上を渡る生の果てに、ただ本と、彼を悼む近親者と友人しか残さないことを選んだのは、驚くべきことではない。しかし、彼が未刊の草稿を破棄せず、いくつものものが今後公刊されるに違いないのであれば、シユヴァルツバルトはたった一作の人ではなく、前世紀最大の作家の一人であり、シヨアー文学と普遍文学の先駆者の一人であることが認められるであろう。

補遺

一、「私の人生で最大の後悔の二つ」

一九六七年二月八日、『ヌーヴェル・オプセルヴァトゥール』誌に掲載されたアン・ドレ・シユヴァルツバルトのインタヴューの抜粋。

ユダヤ人は、他のマイノリティや困難の中にある集団と同じように——自分たちの生存のための戦いを通して——すべての人間のために正義を欲しななければなりません。しかし正義のための彼らの闘争が、自分の所属集団を除くほかのすべての集団の幸福のためだけになされてはなりません。そういうことは世界の歴史の中で決して見たことがありません。しかし、五十年前からユダヤ人革命家に求められてきたのはまさにそうしたことなのです。自分を犠牲にすること、自分の血管を切ること、しかし毎回いつでも不測の攻撃者の側に就くこと。イスラエルに対するユダヤ人進歩派の態度はユダヤ民族史上の恥であり、苦しみです。私の人

生で最大の後悔の一つ、それは、フランスのためにドイツに抗して戦うことができたのに、まさしく一九四七年、ユダヤ人問題のいわゆる真の解決の名において社会主義の中に留まり、イスラエルの戦闘員の間に自分の場所を占めなかつたことです。明らかに私は反対陣営にいたということです。

二、「ユダヤ人とアンチル人——相互発見」

一九六七年二月、『アルシュ』は、アンドレ・シュヴァルツバルトとその妻シモーヌの写真を第一二〇号の表紙に掲げている。その号の中にはシュヴァルツバルト夫妻の長いインタヴューが掲載され、『アルシュ』編集長ミシェル・サロモンは論説において次のような言葉で紹介している。「ローザンヌでアンドレ・シュヴァルツバルト夫妻と私が過ごした時間は、私の生涯の中で大切なものになるう。人種差別——我々の時代の、今なお非常に激しいこの病氣——に挑戦する生活と作品を築こうとする、この静かで熱情のある夫妻には、深く人の心を動かすものがある。」

以下が、アンドレ・シュヴァルツバルト夫妻が交錯するインタヴューの抜粋である。

アンドレ・シュヴァルツバルト 五〇年、五一年の頃から、私はアンチル人と、浅いとは言えない付き合いをするようになりました。初めは一つの出会いに発する友情でした。しかし私にはユーゴスラヴィアやヴェトナムの友人もあり、ただこうした出会いは個人的なものに留まり、私の前にいるその個人の枠を超えることはありませんでした。それに対し、アンチル人とは最初の出会いから、何か違つたことが起こりました。その個人への共感を超えて、その人が出て来た世界や、私がコンタクトを持っている友人たちが代表している人間の歴史全体に、すぐに引かれたのです。「…」

正確な相関関係を打ちたてようとするつもりはありませんが、私たちの経験と同じようなものか知りませんでした。ユダヤ人というのは非常に隔たつた時代に存在した聖書の民だと思っていて、今日なおユダヤ人がいるとは考えてもいませんでした。パリのジュール・フェリー高校で私は哲学を勉強しましたが、そこでユダヤ人の少女に出会いました。彼女がその時期私のたつた一人の友達でした。私たちはすぐに共通点を認め、彼女は家族が強制収容所に送られたことを私に話してくれました。それは一つの大きな地平を私に開いてくれました。というのも、以前私は黒人だけがスケープゴートであり、最悪のことを代表していると思つていたので、白人であるユダヤ人が劣等な人間と見なされていることが理解できませんでした。「…」

私は人間が、白人であれ黒人であれ他の人間を屈従させることができること、それは人間の本性の中にあり、唯一黒人だけがある種の敵意の犠牲者となつてきたわけではないことを理解しました。

原注

- (1) André Schwarz-Bart, *Revue du FSJU*, décembre 1956, et *L'Express*, 10 décembre 1959.
- (2) Arnold Mandel, *L'Arche*, n° 32-33, août-septembre 1959.

訳注

- (一) (1)に訳出したのは、Francine Kaufmann, «André Schwarz-Bart, le Juif de nulle part», *L'Arche*, n° 583, novembre 2006, pp. 84-89の全文である。『アルシュ』はフランスのユダヤ人社会の代表的な月刊雑誌である。翻訳を掲載することを快く許可してくれた『アルシュ』の編集長メイル・ヴァントラテル氏と著者フランシーヌ・コフマン氏に深く感謝申し上げる。F・コフマン氏は、一九四七年パリの生まれ。一九七四年イスラエルに移住。現在、バルイラン大学教授。アンドレ・シュヴァルツバルト研究の第一人者である。
- (二) ユダヤ暦において新年の十日目にあたる贖罪の日で、ユダヤ教徒にとっては断食と祈りで過ごす最も厳守な日である。今年五七六七年の元日は、キリスト暦二〇〇六年九月二三日であった。
- (三) 戦後アルゼンチンに逃げ延びていたアドルフ・アイヒマンが逮捕され、イスラエルで裁判が始まったのは一九六一年である。
- (四) 一九四七年に発表されている。
- (五) ジャックは、一九六二年グワドループのアビムに生まれた。CD『ソネ・カラ』が発表されて後、フランスの代表的な週刊誌『ヌーヴェル・オプセルヴァトゥール』は紹介記事を掲載し、その冒頭次のように記している。「ずつと以前から彼の名前はジャズやアメリカ・ソウルの大物たちのレコード・ジャケツトに書かれていて、訝しく思ってきた人々もあった。このサクソフォーン奏者ジャック・シュヴァルツバルトは、あの二人の作家、一人は両親がアウシュヴィッツで死んだユダヤ人であり、『最後の正しき人』(一九五九年のゴンクール賞)の著者であるアンドレ・シュヴァルツバルト、もう一人はその妻で、グワドループの黒人であり、『雨と風の中のテリユメ・ミラークル』の作者であるシモーヌ・シュヴァルツバルト、と何かつながりがあるのだろうか、と。そう、彼はこの二人の息子である。」(*Le Nouvel Observateur*, 7-13 septembre 2006, p. 66.)
- (六) 「エリ」は、『聖書』「列王記」上・下で語られる古代イスラエルの預言者エリヤのフランス語名である。フランス人キリスト教徒や同化志向のユダヤ人がつける「アンドレ」や「ジャック」、「ベルナル」といった名前に対し、「エリ」は、ユダヤ人アイデンティティを明確にしたいユダヤ人がしばしば子供に与える名前の一つである。
- (七) 黒人と白人の混血。
- (八) FSJUは、統一ユダヤ社会基金 (Fonds Social Juif Unifié) の略称である。「アルシュ」は、トラーラー (『聖書』の最初の五書) の巻物が納められている櫃。
- (九) ドランシーは、パリの郊外にあった強制収容所。ここからアウシュヴィッツへと貨車で送られたところから、「アウシュヴィッツの待合室」と呼ばれること

もある。『最後の正しき人』の主人公エルニー・レヴィもこの収容所から絶滅収容所へと移送されている。

(二〇) ラビによる聖書の解釈。その目的は、様々な法的問題を説明したり、物語、寓話、伝説など多様な文学ジャンルを駆使して精神的な教えをもたらしたりすることにある。

(二一) 一八世紀、ウクライナにおいてイスラエル・ベン・エリエゼルが創始し、東ヨーロッパの民衆の間に広まった、ユダヤ教の敬虔主義的な運動。律法の知識や実践よりも、神への喜びに満ちた帰依を重視した。

(二二) パリにある図書館。

(二三) ハシディズムにおいては、共同体の世襲の首長であり、超自然的な力を賦与されて、神と信者を仲介する。

(二四) 『聖書』に次ぐユダヤ教の主要著作。口伝律法を集成したミシュナーと、その注解であるゲマラから成る。

(二五) 本名は、ヘンルイック・ゴールドシュミット。一八七八年ワルシャワに生まれたユダヤ人。医者であり、また孤児院を設立するなど教育者としても活躍した。一九四二年、ワルシャワ・ゲットーから施設の子供たちとともにトレブリンカ収容所に送られ、殺害された。

(二六) ハシディズム伝統の伝説の一つ。ユダヤ人が迫害されたり苦しんだりするたびに、神の両眼から涙が流れ、深い杯に集められる。そしてこの杯が満たされるとき、神はメシアを到来させる、というものである (cf. S.S.Frug, «La coupe», in Edmond Fleg, *Anthologie juive, Flammation, 1951, p. 394.*)。

(二七) ショアーについての研究機関でもあるヤド・ヴァシエム学院のこと。いくつもの部門を含み、後出の「二〇〇五年に開館した新しい記念館」もその一部を成し、英語では「The New Holocaust History Museum」と呼ばれる施設である。

(二八) 「カデイシュ」は、神の栄光を賛美するユダヤ教の祈りである。信仰告白であるシェマー (Shema) についてユダヤ人が最もよく知り、最もよく唱える祈りである。数種類あり、ユダヤ教徒の宗教生活においては、服喪のカデイシュがとて重要な位置を占める。喪に服する子供がカデイシュを唱えることは、子供が親の記憶に敬意を捧げる最も響き渡るやり方になっているという。(cf. Lazare Landau «La prière juive du Kaddish», *L'Arche*, n° 581, septembre 2006, p. 12.) アンドレ・シュヴァルツバルトが『最後の正しき人』の最終頁に置いたカデイシュは彼の創作であり、「永遠なる神、讃えられよ」という祈りが、絶滅収容所の名前で分断されている。

参考文献

一. アンドレ・シュヴァルツバルトの作品

Le dernier des Justes, Seuil, 1959 ; Livre de Poche, 1968.

Un plat de porc aux bennes vertes (avec Simone Schwarz-Bart), Seuil, 1967.

La maîtresse Solitude, Seuil, 1972 ; Livre de Poche, 1974 ; Collection Points roman, 1983 ; Collection Points, 1996.

Hommage à la femme noire (essai : six tomes, avec Simone Schwarz-Bart), Éditions Consulaires, 1989.

二. 『最後の正しき人』についての研究

- Kaufmann, Francine. «*Le dernier des Justes*», d'André Schwarz-Bart : genèse, structure, signification, doctorat de troisième cycle en littérature française sous la direction du professeur Guy Michaud, Université de Paris XII-Nanterre, mai 1976.
- Kaufmann, Francine. «La genèse du *Dernier des Justes* d'André Schwarz-Bart», *Revue des Études juives*, CXLII (1-2), 1983.
- Kaufmann, Francine. *Pour relire «Le dernier des Justes» - Réflexions sur la Shoah*, Méridiens-Klincksieck, 1986.
- Marcovich, Malka. *La dernière runeur du Juste*, mémoire du diplôme de l'École des Hautes études en sciences sociales, sous la direction du professeur Pierre Nora, 1986.
- Kaufmann, Francine. «Un pionnier de la littérature de la Shoah : *Le dernier des Justes* d'André Schwarz-Bart», YOD, Paris III, n° 25, 1987.
- Kaufmann, Francine. «Entretien avec André Schwarz-Bart», *Pardès*, n° 6, 1987.
- Friedemann, Joë. «*Le dernier des Justes*, d'André Schwarz-Bart : de l'humour au ricanement des abîmes», in *Les Lettres romanes*, XLII, 1-2, Université catholique de Louvain 1988.
- Kaufmann, Francine. «La naissance d'un discours littéraire juif autour de la Shoah en France et en Israël», *Pardès*, n° 9-10, 1989.
- Koseleff, Patricia. *Réception critique du Dernier des Justes d'André Schwarz-Bart, un récit du génocide, en 1959*, mémoire de maîtrise de l'Université de Paris III-Sorbonne nouvelle, 1993.
- Francine Kaufmann : «Les enjeux de la polémique autour du premier best-seller français de la littérature de la Shoah», *Revue d'Histoire de la Shoah*, n° 176, septembre-décembre 2002.